

2021 年度春学期・第 1・2 クォーターの授業評価を終えて

文学部長 伊藤淑子

2021 年度春学期・第 1・2 クォーターの学期末に実施いたしました学生による授業評価アンケートの集計結果をご報告いたしますとともに、授業評価の実施にあたってご協力いただきました関係者各位に深く感謝いたします。

授業評価アンケートは大学における教育活動と学生たちの学修が真の成果を生むための重要なコミュニケーションだと考えています。学生たちがどのように授業を受けとめ、そこから何を得て、そこで習得したことをどのように位置づけているか、授業を担当した教員にとっては貴重なデータであるとともに、授業評価アンケートに回答した学生たち自身にとっても、その集計結果はそれぞれの学びの軌跡を意味づけるものです。学期中にも学生たちの反応や要求に応じて、授業はそのつど微調整されながら、シラバスに明示した内容を実施し、到達目標に向かって展開していきませんが、それが成功したかどうか、学生たちの有意義で有機的な学びを実現したかどうかを教員が知ることができるのが授業評価アンケートであり、教員にとっては教育活動の、学生たちにとっては学修経験の、いわば集大成といえるのが授業評価アンケートの集計結果です。

授業評価アンケートの回答から学生たちの声を聞き、さらに授業運営を改善したいと教員は考えていますが、そのコミュニケーションをいっそう有効にするためには、授業評価アンケートの重要性を学生たちともっと共有しなければならないと思っています。アンケートの方式が昨年度から変更になり、質問紙を用いた調査方法から Web による調査方法になりました。昨年度に比べると多少の回答率の増加はあるものの、残念ながら質問紙方式のころの高い回収率にはとうてい及びません。コロナ禍は大学にも大きな変化を起こし、オンラインの可能性も大きく開きました。デジタル化の波は今後加速することはあったとしても、引き返すことはないと予想します。そうであれば、Web 調査を前提に、対面授業で紙媒体の授業評価アンケートを実施したころの回収率にもどすための方法を考えなければならないと痛感いたします。ヒントは受講生の人数が少ない授業、ゼミ形式の授業における回答率の高さにあるかもしれません。受講生の比較的多い授業においても、学生たちが能動的な姿勢で学び、学修環境を形成する当事者であるという意識を高めることができるように、それぞれの教員がいっそうの工夫をしていくことが求められるとともに、学生がアンケートに回答しやすいシステムを作っていくことが肝要と考えます。

学びの場も大きな変化を受け、学生も教職員も想像もしなかった状況をくぐりぬけてまいりました。授業評価アンケートの集計結果から、ともに考え、現実即した具体的な未来図を描き、学びの理想の実現のための歩みをつづけていきたいと願っています。